

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02524

研究課題名(和文)現代イギリス小説における世界的内戦表象

研究課題名(英文)Representation of Global Civil War in Contemporary British Fiction

研究代表者

板倉 巖一郎 (ITAKURA, Gen'ichiro)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：20340177

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、いわゆる「世界的内戦」を描いた21世紀のイギリス小説の射程を理解する試みである。ナデーム・アズラムやカーミラ・シャムシーのようなパキスタン系作家は、周縁化された人々のトラウマをより広い読者層に伝わる方法で表現する道を模索している。一方で、デイヴィッド・ミッチェルのような作家は、よりSF的な色合いの強い作品で破滅的な未来像を提示している。興味深いことに、双方とも、集団的トラウマや未来への不安といった、私たちが共有している情動に訴えている。この傾向は、現代イギリス作家の多様性を示すと同時に、彼らにとって情動の重要性が増していることも示している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現代イギリス小説がとりわけ9.11同時多発テロ以降の世界をどのように表象してきたか、とりわけ登場人物を通じてその世界がどのような情動とともに受けとめられてきたかを明らかにした。トラウマ研究や情動理論からの知見を得ており、研究成果の一部は学際的なトラウマ研究の論文集What Happened?: Re-Presenting Traumas, Uncovering RecoveriesやTopography of Trauma: Fissures, Disruptions and Transfigurationsにも採録されている。

研究成果の概要(英文)：This project is designed to understand the scope of 21st-century British novels that explore the global civil war, or the never-ending war. While British-Pakistani authors such as Nadeem Aslam and Kamila Shamsie seek to represent the trauma of marginalised people in ways accessible to a wider readership, writers such as David Mitchell produce more imaginative texts that help us envision a post-apocalyptic future. Significantly, both categories of writers address commonly experienced affects such as collective trauma and anxiety of the future threat. These trends at once testify the diversity of contemporary British writers and suggests the increasing importance of affects for those writers.

研究分野：英文学

キーワード：現代イギリス小説 世界的内戦 テロ ト라우マ 情動

1. 研究開始当初の背景

『現代小説』(2013年)で、ロバート・イーグルストンは現代小説のひとつの流れとして「終わりなき戦争小説」を主題にした小説群を挙げている。冷戦終了以降、世界の多くの地域で内戦が常態化し、人道的介入や様々な経緯で世界中がその影響を受けている。9.11同時多発テロや7.7ロンドン同時爆破事件以降、イギリスでも多くの人々がそういった戦争状態に巻き込まれていると感じるようになった。このような現実に取り組む作品は多いが、とりわけ日本のイギリス文学研究において顧みられることは稀であった。

また、こういった作品群の研究は、9.11文学またはポストコロニアル文学という枠組みで論じられることが多かった。前者はマーティン・ランドル『9.11とテロの文学』(2011年)からチャーリー・リー＝ポーター『9.11の十年を書く』(2017年)に至るまで枚挙にいとまがない。ジュディス・パトラーやエリザベス・R・アンカーらが9.11を起源とすることの誤りを指摘してもなお、そのような著述が後を絶たなかった。一方、スティーブン・モートン編『非常事態 植民地主義、文学、法』(2013年)のような著作はポストコロニアル文学だけに焦点を当てているため、イギリス小説研究への貢献は限られたものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、いわゆる「世界的内戦」を描いた9.11同時多発テロ以降のイギリス小説の射程を以下の二点から理解することである。

(1) 周縁化された人々のトラウマの表象

ナディーム・アズラムの『叶えられぬ祈り』(2008年)や『盲人の庭』(2013年)、カーミラ・シャムシーの『焦げ付いた影』(2009年)や『ホーム・ファイアー』(2017年)のような作品は、アフガニスタン戦争で傷ついた人々やテロリストの子どもたちといった、周縁化された人々の苦しみを中心に据えている。こういった作品が苦しみやトラウマをどう表象しているか、そしてそこにどのような政治的な意味があるか明らかにする。

(2) 知識人の不安の表象

一方で、デイヴィッド・ミッチェルの『クラウド・アトラス』(2004年)や『ボーン・クロッククス』(2014年)のような作品は、現実の戦争やテロはあまり中心的な主題ではない。だが、冷戦時代の全面核戦争とは違い対象の定まらない恐怖への不安が、あるいは意図せず自らも加害者になってしまう不安が頭を擡げている。とりわけミッチェルの二つの作品では、現代(もしくは近代)の論理的帰結として破滅的な未来像を提示している。こういった作品が、このような漠然とした不安をどう言語化しているか解き明かす。

3. 研究の方法

トラウマ研究や情動理論から得た知見を活かし、21世紀のイギリス小説を精読する。有益なフィードバックを得るために、現代文学やトラウマ研究を含めた学際的な研究が盛んなヨーロッパの学会に参加、発表した。国内でも研究会を開き、国内外での研究者との交流を積極的にはかった。現代文学研究の最前線に触れるとともに、トラウマ研究や情動理論などの関連領域の知見を得ることができた。

一方で、国内外の論文集の分担執筆や国際学会誌への論文投稿を積極的に行った。とりわけ学際的な論文集への寄稿は、編集者との対話から有益な知見を得られた。論文投稿においては、学会誌からのフィードバックを通じて研究を深化させることができた。

4. 研究成果

本研究の成果は、現代イギリス小説の多様性の一端を解き明かすと同時に、これらの多様な作品における情動の重要性を明らかにした。ナディーム・アズラムやカーミラ・シャムシーは、周縁化された人々のトラウマを、ときとしてモダニズム文学の遺産を受けつぎながら、ときとして通俗文学の手法を採り入れながら、理解可能なものとして表象する方法を模索している。デイヴィッド・ミッチェルは、SF的な作品の中で知識人が持つ漠然とした不安やかすかな希望を、恐怖や恥辱の情動と結びつけている。現代イギリス作家は多様な視点でテロや戦争の恐怖のような現代的な問題に取り組み、周縁化された人々の体験をも内包するように変化してきている。その一方で、このような作品が作家の作品外での政治活動(ツイッターでの発言を含む)や政治的

党派性をストレートに表出してはならず、むしろ国際情勢に対する情動反応を集約したものになっている。この意味で、現代作家における情動の重要性が増していると言える。

なお、これらの成果は国内外の論文集、国際学会誌への論文というかたちで公表している。トラウマ研究や情動理論からの知見を得ており、研究成果の一部は学際的なトラウマ研究の論文集にも採録されていることを付記しておく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Gen'ichiro Itakura	4. 巻 56(3)
2. 論文標題 Screams and laughter: Transfer of affect in Nadeem Aslam's The Blind Man's Garden	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Postcolonial Writing	6. 最初と最後の頁 356-369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17449855.2020.1739292	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Gen'ichiro Itakura	4. 巻 -
2. 論文標題 Fearful and Shameful: Affective and Ethical Reactions to Modernity in David Mitchell's Cloud Atlas	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Critique: Studies in Contemporary Fiction	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00111619.2020.1862040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 板倉 徹一郎
2. 発表標題 ポストアボカリプス文学と核の文化
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Gen'ichiro Itakura
2. 発表標題 Fear, Security and the Messianic in the Postsecular Age: David Mitchell's The Bone Clocks
3. 学会等名 ENCLS (European Network for Comparative Literary Studies)第7回大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Danielle Schaub, Jacqueline Linder, Kori D. Novak, Stephanie Tam and Claudio Vescia Zanini, Francesca Brencio, Cassie Pedersen, Tony Vinci, Peter Bray, Asli Tekinay, Elwin Susan John, Mark Callaghan, Leanne Dodd, Nicholas Quin Serenati, M. Candace Christensen, Marie France Forcier, Diedra L. Clay	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 342 (pp. 153-172)
3. 書名 Topography of Trauma: Fissures, Disruptions and Transfigurations	

1. 著者名 Elspeth McInnes, Danielle Schaub, Mark Callaghan, Zeina Tarraf, Gen'ichiro Itakura, Svetlana Antropova, Paul Vivian, Kate Burton, Monica Hinton, Marie France Forcier, Peter Bray	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 223 (担当34-51)
3. 書名 What Happened?: Re-Presenting Traumas, Uncovering Recoveries	

1. 著者名 板倉巖一郎、河内恵子、田尻芳樹、遠藤不比人、生駒夏美、大石和欣	4. 発行年 2018年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 312
3. 書名 現代イギリス小説の「今」 記憶と歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年12月に研究会「世界的内戦時代の英文学研究」を開催し、国内の7名の研究者とのパネルディスカッションを行った。北米文学やアートなどの研究者からも重要な知見を得ることができた。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------